# 内視鏡センタープログラム

## 【研修目標、到達目標】

消化器内視鏡は上部消化管内視鏡、下部消化管内視鏡、小腸内視鏡（カプセル内視鏡含む）、胆・膵内視鏡と幅広い分野を有しています。近年、各分野において消化器内視鏡医療は著しく進歩しており、診療技術も多岐にわたります。消化管出血の内視鏡的止血術、消化管早期癌の内視鏡的治療（ＥＭＲ、ＥＳＤ、ＡＰＣなど）、食道胃静脈瘤の内視鏡治療（ＥＩＳ、ＥＶＬ、ＡＰＣなど）、総胆管結石の内視鏡的治療（ＥＳＴ、ＥＰＢＤ）、胆管閉塞に対する内視鏡的ドレナージ術（ＥＮＢＤ、ＥＲＢＤ、金属ステント）、消化管ポリープの内視鏡的切除、消化管拡張術など、通常の観察内視鏡のみならず、治療内視鏡の占める割合が増加しています。これらの検査、処置を経験することにより、内視鏡診療に対する理解を深め、技術を習得することが第一の目標です。当センターでは年間約１３，０００件の内視鏡検査・処置を行っており、多数の検査・処置を経験することで早期に技術を習得できる環境にあることが最大のメリットです。卒後３～５年のレジデント期間に、ルーチン検査や処置内視鏡を的確に行えるように指導します。

この間に専門資格取得に必要な内視鏡に関連する多くの症例経験を積むことが可能です。レジデント期間に内科または外科認定医を取得したのち、消化器病専門医、消化器内視鏡専門医などの専門資格を取得できるように指導を行います。

また、レジデント期間中の大学院入学を奨励しており、消化器疾患の基礎および臨床研究や内視鏡検査・処置に関する臨床研究などについて支援を行います。平成１８年度より夜間大学院制度が開始されており、他院や本学で昼間勤務した上で研究歴を得ることも可能です。

## 【後期研修（卒後 3～5 年目）カリキュラム】

消化器内視鏡診療に関わる内視鏡センター、消化管内科、炎症性腸疾患内科、肝・胆・膵内科に所属する医師が中心となって指導を行います。

卒後 3 年目（レジデント A）は、原則として本院で研修し、消化器内視鏡の基本手技と消化器疾患の管理の基本をマスターします。まず、指導医・上級医のもと内視鏡シミュレーターを用いた基本手技の習得から開始し、上部・下部消化管のルーチン検査を行えるように指導に当たります。また、各種内視鏡治療の介助を担当し、処置の技術も習得していきます。病棟では、指導医（教員）の先生ならびに初期研修医と３～４人のチームを組み診療にあたります。

卒後 4 年目、5 年目（レジデント B、C）の期間には、専攻診療科を確定したうえで、引き続き消化器科、内視鏡の専門医を目指して臨床研修を行います。第一線の医師として病棟、外来での診療や内視鏡検査、処置に当たります。十分な治療技術を習得している場合には、指導医のもと主たる術者として治療内視鏡を行えるようになります。レジデントB、Cはプログラムに沿って関連病院で内視鏡を中心とした研修を積むこともできます。

## 【レジデント A（卒後 3 年目）の他部署研修について】

総合診療能力のスキルアップのため、総合診療センターで、レジデント A（卒後 3 年目）期間中に年間を通して、月 2 回の外来研修を、希望により行うことができます。

## 【カンファレンス、症例検討会等】

各科のカンファレンス（キャンサーボード（上部消化管カンファレンス、下部消化管カンファレンス）、内視鏡写真検討会、研究会、勉強会に参加します。

**【その他研修要件、関係学会の内容等】**

自分の専門性を持ち、臨床や研究にあたります。臨床研究の成果を学会や論文で発表します。チームやグループの中堅またはリーダー役としての役割を担います。研修医の指導にあたることも大きな経験になります。

**【関連病院】**（下線病院は卒後３年目以降の臨床研修として派遣実績のある病院です。）

○兵庫医科大学ささやま医療センター　○宝塚市立病院　○明和病院　○神戸掖済会病院
○協立病院　○尼崎中央病院　○西宮協立脳神経外科病院　○製鉄広畑病院　○中井記念病院
○宝塚第一病院　○野村海浜病院　○大阪回生病院　○植木病院　○大久保病院
○北大阪警察病院　○加納総合病院など

**【指導医】**

主任教授：三輪洋人
講師：應田義雄
助教：池原久朝
助教：會澤信弘
（消化管内科、肝・胆・膵内科の指導医も指導にあたります。）

**【研修統括者】**

講師：應田義雄

**【問い合わせ先】**

入局、非入局にかかわらず、内視鏡診療に興味がある方は御連絡ください。いつでも相談に応じます。

内視鏡センター、消化管内科：應田義雄　TEL：0798-45-6662